

歴史性と人の営みに着目した里地里山景観の理解と その教育への展開事例

西城 潔*

Understanding of the Satochi-Satoyama landscape in terms of history and human activity,
and its application for environmental education

Kiyoshi SAIJO

要旨: 宮城県大和町の里地里山景観を事例に、その特徴を歴史性と人の営みの観点から整理した。事例地域の景観は、10⁴年オーダーの地形発達史の産物である丘陵地の小地形を舞台に、より短い時間スケールでの人の営みが重層的に繰り返られることで形成・維持されてきた。こうした歴史性と人の営みに着目した里地里山景観の理解を教育面に展開することは、人と自然の共生的関係、景観成立の社会的側面への気づきや関心を促す上で有効であろう。

キーワード: 里地里山景観、地形、歴史、人間活動、教育

1. はじめに

里地里山とは、かつてわが国でごく普通にみられた、二次林（雑木林）・草地・農地・集落などから構成される伝統的農村景観である。燃料革命や農業の近代化（化学肥料・農業機械の普及）により、また高度経済成長以後の大規模開発により、里地里山の景観は過去数十年の間に急速に変質・消失することになったものの、近年では生物多様性・生態系サービス・循環型ライフスタイルなどの観点から、その価値が見直されてきている（たとえば、養父，2009；国際連合大学高等研究所／日本の里山・里海評価委員会，2012）。

里地里山は、長い歴史の中で、土地の自然環境と人間活動とが関わり合うことで形成されてきた半自然である。したがって、その景観に自然環境・人間社会双方の変遷（歴史性）や人為の痕跡（人の営み）が反映されていることはいうまでもない。こうした歴史性や人の営みの観点から里地里山景観を捉えようとするのは、その価値をより多面的に評価することにつながるだけでなく、今後の人と自然の関わり方を模索していく上で重要な示唆を提供してくれるに違いない。

本稿では、宮城県大和町石倉地区を例に、歴史性と人の営みの観点から里地里山景観の特徴を整理するとともに、そのような里地里山景観の理解がもつ教育的意義について、大学の授業および教員免許更新講習での実践例をもとに予察的な考察を試みる。

2. 大和町石倉地区の概要

石倉地区は、泉ヶ岳東方に広がる標高 500m 以下の

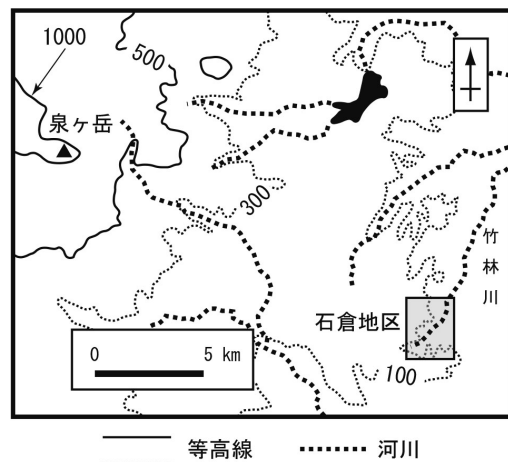


図1. 宮城県大和町石倉地区。
等高線の数値は標高 (m) を示す。

* 宮城教育大学社会科教育講座

丘陵地帯の竹林川上流域に位置する(図1)。行政的には黒川郡大和町に属し、仙台市泉区紫山および明通に隣接する。1964年の1/25000地形図(図2)をみると、当地区の大部分を占める丘陵地の標高は、丘頂部が100-150m、丘陵を刻む谷底面で50-80m程度である。また2000年の地形図(図3)をみると、石倉地区の東～南側に隣接する丘陵地が開発され、住宅地・文教施設・工業団地・ゴルフ場などができている。この地区では1972年の造成開始以来、これらの施設が相次いで開設された¹⁾。

3. 石倉地区の里地里山景観の特徴と歴史

(1) 景観の成立基盤としての小地形

上記の通り、石倉地区は丘陵地帯に位置しており、丘陵斜面とそれを刻む谷で構成される。丘陵斜面はさらに丘頂緩斜面・丘腹斜面・丘麓緩斜面といった小地形単位²⁾に区分され、谷は水路を伴う谷底低地で占められる。また谷底低地より一段高い位置に、段丘面が認められる場所もある。地形発達史的にみると、こうした地形的特徴は丘陵地が谷による侵食を受けることで形作られてきたものである。一般に丘陵地にみられる小地形の形成には、後期更新世(約13万年前～1万年前)および完新世(最近約1万年間)の気候変化・海面変化が強く影響を与えている(田村1990)。当地区の丘陵地において小地形の形成年代を示すデータは得られていないが、このような一般的知見から、以上の石倉地区の地形的特徴の形成にも、10⁴年オーダーの時間がかかっているとみられる。

(2) 小地形に対応した伝統的土地利用とその変化

図4は、1/25000地形図に石倉地区の一部の土地利用(植生を含む)を示したものである。この図からは、三浦・田村(1990)や武内(2001)で概念的に指摘されたような、伝統的土地利用と小地形との対応関係が読み取れる。

すなわち、丘腹斜面や丘頂緩斜面の大部分は森林(広葉樹林・針葉樹林)で、谷底低地の大半は水田で占められ、丘腹斜面下部や丘麓緩斜面・段丘面には畑や家屋がみられる(図4・5)。また谷底低地の上流側(2～3次谷底)には、溜池が作られている場所がある。これらの土地利用はいずれも里地里山景観の代表的要

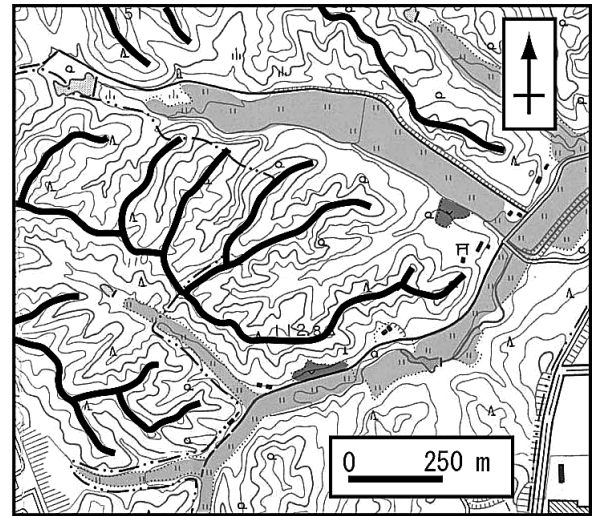


図4. 石倉地区の地形と土地利用。
(国土地理院1998年発行1/25000地形図を改変)
黒実線は尾根線。アミかけ部(淡)は水田、アミかけ部(濃)は畑を示す。



図5. 石倉地区に残る伝統的土地利用。
小地形との対応が明瞭である。

素といえるものであり、それらは丘陵地の小地形と密接な対応関係をもって分布している。

ただし図3に示される通り、大規模開発を受けた場所では、造成によって平坦化した土地に、上記のように開発による新たな街並みが出現し(図6)、小地形に対応した伝統的土地利用は消滅した。その結果、伝統的土地利用と都市的土地利用という、質的に大きく異なる景観が隣接する状況が生まれている。また大規模開発を免れ、小地形と伝統的土地利用との対応関係が現在も基本的には維持されている場所においても、微視的にみればさまざまな変化が生じている。以下は2014-2015年にかけて実施した現地観察や聞き取り調査の結果などから判明した、過去10年程度の期間に



図6. 石倉地区に隣接して形成された新しい街並み。



図7. 近年できた都市住民向け施設。
(Google earthの画像を改変)
①:市民農園 ②:ドッグラン



図8. 谷底低地にできた市民農園

みられた土地利用の変化である。図7に示したのは当地区に新たに出現した2つの施設で、うち1つは市民農園であり、以前水田として利用されていた谷底面に2008年頃に作られた。利用者は、主に近隣の団地に居住する住民である。もう1つの施設であるドッグランは、かつて畑であった丘麓緩斜面～丘腹斜面を利用して2004年に開園した。

(3) 地区の暮らしとその変遷

石倉地区のある民家において、当地区の歴史や暮らしの変遷についてお話を伺うことができた。以下は、聞き取りの概要である（聞き取りは2014年夏～秋に実施）。

先祖は当地区への最初の入植者で、500年前のお墓があることから、入植時期はその頃であったと思う。現在も使っている家屋（古民家）は、ケヤキ・クリなどの材を用いて釘を一本も使用せずに建てられており、築250年になる。東日本大震災の際、隣接する新築家屋には被害があったが、古民家には問題がなかった。かつて茅葺きだった古民家の屋根は平成5年に改築した。それまで茅は近所で刈っていた。古民家は天井が高く、夏は涼しくて扇風機は不要だが、冬は寒い。居間の真ん中にある囲炉裏は、40年くらい前まで使っていた。今も正月にはここで炭を熾したりする。ここ数年、近所にイノシシやクマが出没するようになった。とくにイノシシは3年前（2011年）から出るようになってきている。

4. 里地里山景観にみる歴史性と人の営み

本章では、地形図・衛星写真の判読、現地観察、聞き取り調査の結果に加え、一般的知見などもふまえて、石倉地区の里地里山景観と、各景観の形成に関わる時間および形成要因（とくに人の営み）との関係を整理してみたい。

石倉地区の地形的特徴には、過去1万年以上に及ぶ丘陵地の開析過程が反映されている。また土地利用を始めとする景観要素は、その産物である小地形の上に展開している。すなわち里地里山景観は、 10^4 年オーダーの地形発達をその成立基盤にしている。

前章で述べた、谷底低地に水田、丘腹斜面・丘頂斜面に森林、丘麓緩斜面や段丘面上に畑・家屋が分布するという土地利用の特徴は、いうまでもなく人間が居住し始めてから成立したものである。500年前の先祖の入植、250年前の家屋の建築という上記聞き取り結果にもとづけば、小地形に対応した伝統的土地利用は、過去数百年間、形成・維持されてきた景観とみなすことができる。このような数百年の歴史を持つ里地里山景観は、過去数十年～数年というより短い時間の中

で、社会情勢の変化によるさまざまな改変を受けている。その改変には、新たな都市的街並みの出現といった、景観の様相が根本的に変わってしまう大規模なものもあれば、伝統的土地利用がわずかに変更される程度のものである。表1には、これらの景観とその形成に要するおおよその時間、形成要因との対応関係を示した。

表1. 石倉地区の里地里山景観にみる時間(歴史性)と形成要因

景観	時間	要因
丘陵地の小地形	数万年	気候, 海面変化
伝統的土地利用	数百年	近世以前の入植・開発
都市的街並み	数十年	高度経済成長期以後の大規模開発
都市住民向け施設	数年	農地・里山管理の衰退 都市住民による需要

以上のように、石倉地区の里地里山景観は、10⁴年オーダーの地形発達史の産物である丘陵地の小地形を舞台に、より短い時間スケールでの人の営みが重層的に展開されることで形成されてきた。このように景観の成立過程を歴史性と人の営みから理解することで、里地里山の価値の多面的評価や、人と自然との関わり方へのより深い洞察が可能になるのではなかろうか。

5. 教育への活用事例

著者は、自らが担当する大学の授業や教員免許状更新講習の機会を利用して、石倉地区の里地里山景観を題材とした教育実践を試みている。本章では、その経験から2つの事例を取り上げ、本稿で述べてきた歴史性と人の営みに着目した里地里山景観の理解が、教育面でどのような意義をもつかについて予想的に考察する。なお両事例とも環境教育を主目的とした教育実践例ではないが、人と自然の関係性やその変遷に関する視点を受講生に提供することを意図した取り組みであり、その内容は環境教育にも通じるものであろう。

(1) 現代的課題科目「環境と開発」(2014年度)

現代的課題科目の一つである「環境と開発」では、2014年度に「里山から環境と開発を考える」というテーマのもと授業を行った。このようなテーマ設定を行ったのは、学生に環境と開発の関係を考えさせる上で、里地里山景観にみられる人の営みへの認識を深めることが重要と考えたからである。授業は、講義形式

のみならず実習・演習的な内容も取り込みながら進めたが、その一環として、石倉地区において半日程度のフィールドワーク(巡検)を実施した。現地では、伝統的里地里山景観および大規模開発による街並み景観の観察、民家の見学と地域住民への聞き取り、自由時間を設けての学生各自による観察などを行った。この巡検後に学生に課したレポートから、人の営みに関わる記述をいくつか紹介する。なお以下の表現には、レポート作成者の意図を損なわない範囲で、著者が修正・加筆を施した箇所がある。

- ・民家の材料の木を裏山から採ってきたものと聞き、人間と自然が共生する伝統的里山利用をみてとることができた。
- ・家の材木が自宅の裏山で採ったものであることから、地産地消が実際に行われていることがわかった。
- ・江戸時代に建てられて今でも残っているような家には入ったことがなかったので、貴重な経験になった。
- ・植生が一帯で必ずしも一様でないのは、地域住民による伐採の歴史が植生の遷移を生んだ結果ではないだろうか。
- ・里山の樹木を生活資源に利用することによって継続的に人の手が加えられ、里山として存在することができたのだろう。
- ・近年の大規模な開発によって里山が失われ、それに伴ってその土地の景観や自然、人々の暮らしが変化したことがわかる。
- ・社会が成長し、変化していく中で、里山も開発などによって大きく変化した。

初回の授業で里山についての知識やイメージを自由に書かせた際には、「里山とは人工の手が加わっていない山」という回答をした学生すらいたが、以上の内容から、学生達が巡検での直接的見聞を通して、里地里山景観の形成・維持における人の営みの役割を認識するに至ったことがわかる。とくに、人の営みが地域内での生産・消費や資源の持続的利用、自然との共生を成立させてきたこと、社会の変化が里山のあり方に大きな影響を与えたことなどが強く印象付けられたようである。このように里地里山景観における人の営みとその意味・役割への理解を通して、人と自然との相互依存的關係への気づきが促されることが期待される。

(2) 教員免許状更新講習「地理学的景観分析から地域をとらえる」(2015年度)

中学校・高等学校の社会科教諭を対象として実施した本講習では、景観を地域の姿をとらえるための分析対象と位置づけ、座学に加え、石倉地区においてフィールドワークを実施した。その内容は、上記「環境と開発」同様、伝統的里地里山景観および大規模開発による街並み景観の観察、民家の見学と地域住民への聞き取り、自由観察である。以下には、講習の最後に受講者から出された感想のいくつかを紹介する。なお以下の表現は受講者の発言そのままではなく、発言者の意図を損なわない範囲で著者が手を加えたものである。また()中に※付きで示したのは、表現を学術用語的に書き直したものである。

- ・ 沢(※谷底低地)は水田として利用され、その端(※丘麓緩斜面)に家屋がある。
- ・ 沢はさほど大きくないが、この程度の水量で水田に必要な水がまかなえるのか?
- ・ 市町村境界は谷を囲むように(※分水界に沿って)引かれているようで、生活と水との密接な関わりがうかがわれる。
- ・ 谷筋の合流点付近に家屋が作られたのではないか。
- ・ 沢に挟まれた舌状部の突端(※尾根の末端)に神社が設けられている。
- ・ 入植や歴史的な水田開発のプロセスが興味深い。
- ・ 一朝一夕にできた風景ではなく、先人の努力の積み重ねがうかがえる。

上記「環境と開発」の受講生による感想に比べて、景観中にみられる人の営みを歴史的な文脈で捉えようとする傾向が強い。これは本講習の受講者が歴史分野に造詣の深い社会科教諭であったことによるものと推測される。また水利用の特徴や工夫についての言及が目立ったのは、景観の特徴を社会的側面から捉える傾向が強かったことを示唆するものであろう。このように里地里山景観を通して地域の姿を探ろうとする場合でも、歴史性や人の営みは重要な着眼点となることがわかる。

6. まとめ

本稿では、宮城県大和町石倉地区を例に、歴史性と人の営みという観点からみた里地里山景観の特徴を指

摘した。またそのような景観理解の教育的意義について、大学の授業および教員免許状更新講習での実践事例をもとに考察した。その概要は次の通りである。

(1) 里地里山景観は、1万年以上に及ぶ地形発達により形成された地形的特徴(丘陵地にみられる小地形)をその成立基盤としている。これら小地形とよい対応関係を示す集落・農地・森林などの伝統的土地利用(歴史的に継続してきた人の営み)は、数百年以上の歴史をもつ。

(2) 過去数十年～数年の間、里地里山景観(伝統的土地利用)は、大規模開発や都市・農村を取りまく社会的状況の変化による影響を強く受けている。その結果、都市的街並みや都市住民向け施設の出現といった景観変化が起こっている。

(3) 以上のように、歴史性や人の営みの観点から里地里山景観とその変化を捉えることは、里地里山の価値を多面的に評価したり、人と自然との関わり方へのより深い洞察を可能にしたりすると考えられ、教育面への応用が期待される。

今後、本稿で提示した視点を、環境教育面でさらに幅広く展開していきたい。

注

- 1) 泉パークタウンオフィシャルサイト、
<http://www.izumi-parktown.com/>
(2016年1月24日閲覧)
- 2) 「小地形」について、吉川ほか(1973)は「縮尺1/5万～1/1万の地図および5-20mごとの等高線でその特徴が把握できる地形、貝塚(1998)は「最小地形のひろがり」が100m(オーダー)」の地形と、それぞれ定義している。

謝辞

大和町の熊谷まき子氏には、聞き取り調査や現地観察に快くご協力いただきました。公立大学法人宮城大学事業構想学部の宮原育子教授には、現地情報の入手や宮城大学構内への駐車について便宜をはかっていただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 貝塚爽平 1998. 発達史地形学. 東京大学出版会, 東京都.
- 国際連合大学高等研究所／日本の里山・里海評価委員会 2012. 里山・里海 自然の恵みと人々の暮らし. 朝倉書店, 東京都.
- 三浦 修・田村俊和 1990. 土地利用の歴史と二次林の成立過程. In: 丘陵地の自然環境－その特性と保全－. 松井 健・武内和彦・田村俊和 (編), 古今書院, 東京都, pp. 20-27.
- 武内和彦 2001. 二次的自然としての里地・里山. In: 里山の環境学. 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史 (編), 東京大学出版会, 東京都, pp. 1-9.
- 田村俊和 1990. 丘陵地とは. In: 丘陵地の自然環境－その特性と保全－. 松井 健・武内和彦・田村俊和 (編), 古今書院, 東京都, pp. 1-4.
- 養父志乃夫 2009. 里地里山文化論 上 循環型社会の基層と形成. 農文協, 東京都.
- 吉川虎雄・杉村 新・貝塚爽平・太田陽子・阪口 豊 1973. 新編 日本地形論. 東京大学出版会, 東京都.

